

砂と暮らし

ITP だより 砂に学ぶ

⑨

ITPで学んでいる学生たちの現地指導のため、チュニジアに行ってきた。午前0時30分に関西空港を飛び立ち、中東のドーハを経て研究所についたのが午後5時。8時間の時差があるので、25時間の長旅だ。出迎えてくれたのが、2人の学生の笑顔だった。昨年と変わらぬ笑顔。そして日に焼けて、「こころなし」か遅しくなった印象を受ける。今回の任務は、研究の進み具合をチェックし、尻をたたくことである。

明るく、タフな学生育つ



チュニジア南部の大塩湖で植生と土壌の調査。植物の周りは真っ白に集積した塩。こんなところにも植物は生きています。

学生が作ってくれた夕食を食べたあと、深夜まで現状報告を聞く。昼間は現地の指導教官を交えた検討会だ。調査や、試験研究の現場にも足を運ぶ。時間を見つけて、近くの町に買い物にでかける。驚いた。学生はアラビア語を操っての値引き交渉。現地語がまったく分からない私は学生の後ろで事のなりゆきを見守るだけである。日本から遠く離れた地で、肉体的にも精神的にもタフな学生が育っているのを実感した。これこそがITPの成果である。

(鳥取大学乾燥地研究センター教授
・山中典和) (水曜日に掲載)

ITP (若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム) 国際的に活躍できる若手研究者を育成することを旨とし、日本学術振興会が支援する事業